



ピクタインダカン

(おきみがりにぼし)

第 43 号

発行日 2023年10月20日

発行人 矢代 しず

秋田市御野場7-1-29-305

晩夏

避暑地の午後

肘掛け椅子に座って

ひらいた空の青さに心を広げる

白蝶が草色の腕のなかで遊んでいる

空色の紅茶に

レモン果汁を数滴

瞬時にかわるマジックで

カップのなかはスミレ色

あたりに夕暮れが降り

立ちならぶ樹々に西日が纏わりつき

紅葉ふうの華やかな装いに

やがて樹影が増幅し

濃緑の壁に囲まれると

晩夏の静けさが聞こえてくる

幻想の旅

時は流れ

生家は無くなり

古里はコロナ禍でより遠くなった

そんなとき

三姉妹の旅行が持ち上がる

七月一日

縁の磁石に引きつけられるように

福島駅で落ち合った

久しぶりの再会に

互いの眼は煌めいて

さつそく市内観光

夜は温泉でくつろぐ

部屋に漂う

温かい秋田弁の抑揚

醸す日本酒の匂い

翌日は

全長一三五kmの只見線に乗車

車窓から飛び込んでくる

自然が織りなす景観美

赤い鉄橋とカナリア色の川面

今宵は美人の湯宿

枕の下では記憶が溢れ

毛細血管のように

心の襞に沁みてゆき

出で湯の夜は静かに更けてゆく

早朝

窓を開けると

幻想的な川霧

水鏡を覆う白い龍が

景色を呑み込んでいる

やがて

朝日が差しはじめると

巨龍は身をくねらせ

虚空に帰っていった

山行記 — 鳥海山（新山）・七高山 —

【第一日目】

二〇一一年に鳥海山に初登頂して以来、数度の山行を試みた。が、新山には登ったことがなかった。加えてコロナ前より体調を崩し、そのほとんどが分岐点の七五三掛^{しめかけ}か御浜小屋、賽ノ河原までとなった。七〇を越え、近頃とみに体力の衰えを感じる。もう今しかないと、痛切に思うようになった。

二〇二三年八月五日（土） 新山の頂上に立ちたい、との願いが叶った。山小屋泊の二日の行程。駐車場は混んでいたが、運良く停められた。九時〇五分、象潟口コース（鉾立^{ほこだて}）から入る。鳥海山大物忌神社までの長い道のり。今までにないほどの超のんびりの親子登山が始まった。かなり暑い。

すぐに玉の汗をかく。空を見上げると真っ青な鳥海ブルー。ウグイスが上手な歌で迎えてくれた。鈍行登山は景色を新たにす。犬の字に似た雲。見えないが感じる風の手。整然と並ぶ拓かれた石畳。くねる緑の稜線は荒波のよう。ニッコウキスゲの橙黄色。飛び交う無数の蜻蛉は赤の水平飛行。

それにしても重い。二五^{トル}リ用のリュックはパンパン。娘のも膨れている。二人分のシユラフ（寝袋）等のかさばる荷物でかなりの重量。コロナ以降、持参する物も変わった。一二時〇四分、七合目御浜に到着。丸い鳥海湖（鳥ノ海）の水位がすごく低い。初めての光景。一本五百円の水を二本購入。

トイレ休憩後、一二時二七分出発。しばしば下山客と出会う。一時〇五分、扇子森（二七五九メ）御田ヶ原、八合目の八丁坂と火山礫の道を辿る。半端ない暑さと重さへの挑戦。外輪コースと千蛇^{せんじや}谷コースの分岐点の七五三掛に着く。雪溪のある

千蛇谷コースを取る。山肌に組まれた足場が怖い。

身投げするような感覚の丸太の階段。この一段目で目眩を起こして以来の再訪。後ろ向きに下りたり、腰を落として何とか乗りきる。千蛇谷でオコジヨに会ったのは二〇一六年。長大な雪渓も少ない。内壁からの落石も多く見られる。ここから先は、ひたすら登り、萎えた根性を奮い立たせる。

しんどい！ 気力体力が汗とともに大地に溶けてゆく。長年の辛苦を一度に体験するような疲労困憊。〈もうすぐだよ〉の声に見上げると、石垣に守られた赤い屋根が覗く。四時四三分、やっと御本社到着。早速、ポトル二本を買う。七・一km、七時間三八分の山行。最高峰新山は明朝にお預け。

宿泊は一〇〇人。三班に分かれての食事。夕食時、すごい目眩。ご飯一口、お汁三口でギブアップ。個室に転がり込む。背中がミシミシ痛む。吐き気

もある。このまま治らなかつたらどうしよう。楽しみにしていた夕日や星空も望めない。とにかく眠り、泥のように眠る。猛暑のなか頑張り過ぎた。

【第二日目】

夜中の一二時に目が覚めた。トイレに行こうと、ヘッドライトの明かりでウロウロ。〈熊注意〉の看板を思い出す。恐怖より目眩がなく安堵。なんと星が瞬いている！ スマホを取りに戻り、娘と一緒に空を仰ぐ。暗闇に浮かぶ星の黄色い瞳。二度とは拝めないだろう光景を、しかと瞼に刻む。

ガスが出てきた。すさまじい勢いで激しく盛り上がり、たちまち拡がる。星は一瞬にして消えるが、再び現れる。念願の星を眺望できた喜びに、娘の優しさに心底ひたる。これまでの苦勞が一気に吹っ飛んだような幸せ。娘を育てたわたしが、いま娘に見守られている。生きていればこそその歡喜！

五時二六分、朝食前に新山に挑む。外輪山を屏風にそびえ立つ様は圧巻。巨岩が積み石のように累積。緊張で顔が引きつる。ペンキの目印に従って登る。胎内潜の大亀裂の底を通り、さつに登ると、新山頂上(二二三六メートル)。ご来光はまぶしく、ダイヤモンドの輝き。日本海に映る影鳥海は奇觀！

六時一三分に下山後、朝食。風が風ぐ。復路は外輪コース。七時二〇分、社務所の東側から七高山(二二三〇メートル)直下の雪溪を渡る。足場の悪い急坂を鎖伝いに登り尾根へ。八時〇二分、荒々しい岩肌の七高山到着。彼方に奥羽の山並。行者岳、

伏拝岳、文殊岳と越え分岐の七五三掛を目指す。

崩壊地が数カ所あり、山の衰えを実感。今年はおバイケイソウとアザミの当たり年か、群生だ。にわかには黒雲がせり出した。山霧の帳が下り、ミストがかかる。へヤツホー、若者の声。涼しさに凹んだ意気が揚がる。一二時四二分、御浜小屋に到着。登つて下つて、自分の足でたどり着いたぞ！

しかし口数も少なくなり、娘の叱咤激励で歩く。入道雲が悠々と胡坐をかいている。夏がドカンと爆発したような暑さ。七輪で焼かれるサンマの気持ちがよく分かる。一五時一五分、鉾立登山口に戻る。八・五km、九時間四九分の山行。二日間の合計は一五・六km、一七時間二七分(休憩含む)。

歩荷さんのように重い荷物を運んでくれた娘。空の青さに心を遊ばせ、鳥の歌に聞きほれ、自然に身をゆだねる至福の時間。いつも感謝しかない！

後日、娘からメールが届いた。へお誕生日おめでとう。まだまだお若いので未知体験致しましょう。身体のケアは必要よ！ また、よろしくね。〜と。



徒然のエチュード 40

①

しこたま暑い山中

トンボが

ビュンビュン飛び交う

岩の上にもトンボ

指を近づけても

羽に触れても

一向に逃げない！

今度は

手の甲に止まり

じつとして

なんと人馴れしていることか

歩き出すと

ついて来るではないか！
愛トンボみたい

きつと

ここまで登ってきた

ご褒美に違いない

鳥海ブルーの空を飛翔する

トンボは

お日様色の赤

②

薪用の

でっかい木をもらったので

ベランダに置いた

娘

夜

枕元で

涼しげな音？

強弱をつけ

抑揚も効かせて

次第に

熱を帯びて

コロコロリー チョンギース ルルルルルル

リーンリーン チンチロリン スイツチヨ

ガチャガチャガチャ

真夜中の大演奏会

木の中にいたのねえ

寝不足の娘は

あきらめ顔

【現代詩の勉強会】

去る十月十四日（土）、あきた文学資料館において、第十三回「ピッタの会 現代詩勉強会」を開催した。司会進行は矢代レイ。内容は、拙詩「冬の樹が出来るまで」―詩もダイエツト―。参加者は十名であった。

*

「ピッタの会」もお蔭さまで十三回を数える。

最近の勉強会では、講師ご自身の作品を「○○が出来るまで」と題して、ご講演をいただいている。

詩は多様である。十人十色、作者によって詩を作る過程や表現には違いがある。従って、一括りで「こうだ」といえる模範もない。

心を鎮め、じつくりと詩と向き合う豊かな時間を参加者と共有できることは、この上ない喜びである。勉強会が詩の間口を広げるきっかけになれば幸いである。これから先も、参加者の皆さまと詩を育んで行きたいと思う。

●タイムスケジュール

- ① 開会挨拶
- ② 自己紹介
- ③ 「冬の樹が出来るまで」
- ④ 質疑応答
- ⑤ 感想
- ⑥ 次回案内
- ⑦ 閉会

●アンケートより

・詩をつくる上での推敲の大切さを教えていただき、本当にありがとうございました。最近、詩を書く題材が浮かんできなく、仕方ないなと想っておりました。そこで、ビール壘からビールが飛び出して弾けるまで待つことだというお話があり、改めて今後弾けてくるまでためておいて、その時に詩作したいと考える勇気をいただきました。水のようにどんなものに対しても形を変え、しみ込むことができるように心が無我になればと思います。今後とも宜しく学ばせていただきたいと思います。

・謎が2つ解けました。言葉がいつもくつきり形をもっていたのは、推敲のおかげでしたか。自然の描写ということですが、自然との対話があるんだ、と気付きました。

・以前の会で詩を解体するという、私にしてみればびつくりのお話を聴きましたが、今回は又異なった、一段と踏み込んだ言葉の選び方を学びました。(それも矢代作品、自らのもので)。又、倒置法、受動能動等のことば、意味を知ることができて大変勉強になりました。

・詩の出来るまで、希望のとおり続けていただきありがとうございました。作り方は人それぞれですが、その違いも面白いものです。3回目ですが、参考になる所が多いです。

・出席して、いかに自分は勉強不足かよくわかります。思いつくまま、べらべら書きなぐり、あとは言葉を入れかえたり、削除したりしていますが、ただ心のもやもやを吐き出しているだけ。「詩」という本質的なルールを知らないので、

とても勉強になりました。「詩」を投稿するにあたって、私の場合、今日の資料①で出しているなくと、反省です。

・詩の朗読を聴くと、詩がよく判る。一度にスラスラと最終稿になるのではなく、様々な感覚を動員して作るプロセスを教わり、詩の深い鑑賞法を知り、味わいが増した。根気、忍耐力に感心、感動した。作品は文体に透明感があり、硬質性があり、a gifted poet だと思う。心構えから、技術的な言葉の選び方まで、タメになって楽しい会だった。

・私はいつも適当に書いていましたので、こんなに順番があるとは思いませんでした。とても勉強になりました。こんなに決まりがあるとは、初めて知りました。



【あしがき】

先日車で国道を走行中、クマに遭遇した。クマまで20^{メートル}の至近距離。1.5^{メートル}はある成獣。国道の両側に家が建ち並んでいたにも関わらず、道路を横切ったのである。

クマは利口だと思った。対向車は1台も来ず、渡るのに絶好のチャンス。安全を見計らっての行動に感心さえした。車中から見ていたので余裕があったが、不意に出くわしていたらどうなっていたことか――。

*

10月15日(日)午後9時、「NHKスペシャル」で、怪物ヒグマOSO18の記録を放映。草や果実を全く食べない肉食のヒグマ。この一頭に66頭の牛が餌食となった。人間が作り替えた環境が、森の生態系に影響しているように思えて仕方ない。OSO18と名づけられたヒグマは、最後には射殺された。

